

竜転だお！
2

登場人物紹介

▲アウレスト

人型はとても美形な、もと青の子竜。涙もろく、優しい心の持ち主。

▲ジョルジュ

アウレストの竜騎士。ギルのことを知っているようで……

▼ユーディス

アウレストの養い親。柔和な顔の男性竜。

▲カイギルス

シェイリイリの兄で、妹を溺愛している。美しい銀色の竜。

▲ギル

シェイリイリのひと目惚れの相手。傭兵団の一員だったが、正式に竜騎士となるべく、シェイリイリとともに王都に旅立つ。

▲シェイリイリ

竜騎士との契約により、人型もとれるようになった、ピンクの竜。自身の竜騎士であるギルのことが大好き。

▼イエル

子竜だったシェイリイリを誘拐した犯人の仲間。謎の人物。

第一章 旅路

遮竜殿しゃりゅうでんへ行くための旅がはじまった。私——シェイリイリイと、私の竜騎士であるギルと、友人のジャックさんが一緒だ。

遮竜殿。そこは、我が国カサトア王国が誇る竜騎士団の竜騎が住んでいる場所である。何故私なぜがそこへ向かっているかというと、私が元々、そこで暮らしていたからだ。

今はこうして人型がとれているけれど、遮竜殿にいたときの私は、ピンクの子竜の姿だった。国から大切に育てられていた、騎竜候補の子竜。

でも、なんと私、その遮竜殿から誘拐されてしまったのだよ！自力で誘拐犯のもとから逃げただけど、そこで私は運命の出会いをした。それがギルだ。

思い返せば、色々あったな……。そんなことを考えつつ、森を進む。

村を出てからずっと、森に囲まれた道を歩いている。

昼食は、森のなかで採った果物や、村から持参したサンドイッチを食べた。ギルに、あーんをせがんだら怒られた。ちえー。ギルがまだ私の性別を知らなかった子竜時代には、平気でやってくれたのにー。ふうふう。

ギルは女の人が苦手で、人間の姿になった私が近づくと離れてしまう。せっかくこんな美少女になれたのに！ まあ、言葉は拙いけれども……

「……扱いに、すげー困る」

と、非常に困り切った顔でギルに言われた。あーんは仕方なく諦めたけど、引っついて昼食を食べることは許してもらえたので、満足である。

「ギル、ギル」

「何だ」

「呼んだだけ！」

「ああ、そうか」

幸せだ。隣にはギル。向かいには、私たちの邪魔をしないように少しだけ離れて座っている、ジャックさん。

ジャックさんはギルの親友で、ナイフ投げが得意なんだよ。

そんな人たちに囲まれて旅ができるなんて、私は幸せ者だ。

この旅は、二日目に入ろうとしている。今は、真夜中だ。森のなかは、真っ暗。ほうほうという梟の鳴き声が聞こえてくる。獣避けの焚き火が、唯一の光源だ。現在は、ジャックさんが見張りをしている。ギルとは数時間で交代するんだよ。

そう！ 今のギルは眠っているのだ！ マントにくるまり、ぐっすりだ。

「なんて、都合の、良い」

私はそう呟くと、くるまっていたマントから這い出た。

「あれ、シエリイ。起きてたんですかー」

「うん。ずっと」

私はキリッとした顔で、ジャックさんに言う。ジャックさんは、口をへの字にし、腰に手を当てた。

「ダメじゃないですか。ちゃんと寝ないと、旅に響くんですから」

「いいのー」

「良くないですー」

むう。ジャックさんに怒られちゃった。だけど、諦めるわけにはいかないのだ。

「ちゃんと、寝ます」

「なら、寝床に直ぐ戻ってくださいよー」

「それじゃ、ダメ。戻るの、ダメ！」

「なんで、ですか」

私は、むんつと胸を張った。そして、すーすーと寝息を立てるギルを指差す。

「あそこで、寝るのー！」

「あー……。わかりました。頑張ってくださいね」

ジャックさんは、乾いた杖を火にくべながら言う。

「頑張る、の！」

ジャックさんにそう言うと、私はずりずりと膝立ちで移動した。

ギルは、私に気づかない。ギルって、一回寝ちゃうとなかなか起きないんだよね。朝にも弱いし。まあ、そこがギャップ萌えで可愛いんだけど！

いつもながら、寝ているギルはとっても無防備だ。幼い寝顔に私はうっとり。

「ギル、ギル〜」

「ん……」

掠れた声で呻くギル。色気がにじみ出ている。

私はずもぞと、ギルのマントに潜り込む。あつたかーい。ギルは、私の体温に感じるものがあつたのか、身じろぎをした。

そして寝返りを打つと、あろうことか私をギュッと抱きしめる。きゃー！ そうだった、そうだった。ギルは、寝ているときに何かに抱きつく癖があるのだった！ わーい。

「ギル、好き」

私も抱きつき返す。密着度がハンパないですよ。

「あー、仲が良くて良いですねえ」

「えへへ」

私たちのいちやつき振りに、ジャックさんは呆れてる。けど、気にしないのだ。ギルの体温に包まれて、私はご満悦だ。

子童時代は、いつもギルに抱っこされて寝ていたのに、人間の姿になった途端にギルは離れて行ってしまった。くすん。

ギルが入っていた傭兵団の団長さんであるガッドウさん曰く、私とギルの、竜と竜騎士としての契約は簡易式だったらしい。だから今の私は、言葉は拙いうえに、「見た目は大人！ 中身は赤ちゃん！」なのだそう。というわけでギル、気にせずに甘やかしてくれればいいのに。不満だよ。でも、今はギルに密着できているからいいや。あー、それにしてもギルの体温あつたかい。あまりにも気持ち良くて、私はうっとりと目を閉じる。

「お休み、なさい」

「はい。風邪を引かないよう、気をつけてくださいねー」

ジャックさんの言葉を聞き、私は眠りの世界へと落ちていった。



ごぼり。泡が、上へと上っていく。

いつもの夢だと、直ぐにわかった。市松模様の床と、そこから上る泡。そして、ゆつたりと座れそうなソファー。

ただ、私の服装がちょっと違う。いつもなら、レースたつぷりのヒラヒラな服なのに、今の私は旅装束だ。



夢に現実が反映されている？ 不思議な気分です、私はソファアに座る。何をすることもなく、ただぼんやりと座り続ける。

静かだ。静けさに満ちた空間と、ソファアの感触が心地好い。私は、ソファアに深く腰かける。あー、あまりの気持ちの良さに、夢のなかなのに寝ちゃいそうだ。

私は眠気を堪えようと上を見上げた。上は、相変わらず何も見えない。真っ暗だ。ただただ、泡が上がって消えていく。あの泡は、どこに向かっていているのだろうか。

ふと、私はあることに気がついた。

泡のなかに、ピンクに色づいたものがあるのだ。最初は、私のピンクの髪色が映り込んだのかと思っただけだ。

よくよく目を凝らしてみれば、泡の内部にピンク色の何かが入っているのだとわかった。その何かの色が、泡をピンクに見せていたのだ。私はさらに目を凝らす。ピンク色の正体を確かめる為に「……葉っぱ？」

泡のなかに入っていたのは、ピンク色の葉っぱだった。ピンクな葉っぱって、珍しいな。そう思っている間にも、市松模様の床からはピンク色の泡が上がってくる。

この床の下には、何があるのだろう。

私はソファアから立ち上がり、市松模様の床を歩き出す。この床は、途中で途切れていて、私が座っていたソファアを中心に半径五十メートルぐらいしかないようだ。

しかし、夢の空間は、床だけではなかった。市松模様の床より向こうに、ゆらゆらと揺れる水面

が見える。

市松模様の床と水面の境目まで来た。水面に、私の姿が映る。相当綺麗な水のようなのだ。いつかの夢でも、私はこの水に自分の姿を映した気がする。そのときは、市松模様の床がなかったはずだ。うる覚えだけでも。

あのとき、私は夢から覚める間に水面に身を投げ出したような気がする。そのときに、何か見なかっただろうか。……覚えてない。まあ、いいか。今から見ればいいんだし。

私は床にしゃがみ込み、そっと水面に顔を寄せた。さて、何が見えるのかな――

「う、わあああ！」

掠れた叫び声で、夢から覚めた。この声はギルだ。何事！

すっかり頭が冴えた私が体を少し起こすと、至近距離にギルの顔があった。ギルは真っ赤な顔で、口をバクバクとさせていた。

「ああ、ほら。ギルさんが叫ぶから、シエリイが起きちゃったじゃないですか」

「なっ、だっ、お前……っ」

呆れ口調のジャックさんが、ため息をついているのが見える。ギルはもはや言葉になつていない。ああ、そういえば。私、ギルに密着して寝てたんだっけ。ギルの体温、気持ちよかったよ。羞恥心？ 恋する乙女の前では、意味ないですよ。

「シエリイ、なんで、お前、俺と……っ」

私は、上半身を起こした状態のギルにのしかかるようにしてから、首をこてんと傾げた。

「ギルと、一緒に、寝たかったの」

「な、あ……っ」

さらに赤くなるギルに、私はしゅんとうなだれてみせる。

「ダメ、だった？」

上目遣いなのは、狙ってます。

「い、いや。ダメ、とか……っ」

ギルは、顔を逸らしてどもる。居心地悪そうに、私から少しでも距離を取ろうとしているようだ。体をずらしている。

いや、逃がしませんよ！ 私は、ギルにぎゅうっと抱きつく。

「ギル、大好きー！」

ぎゅうぎゅうである。

「う、あっ」

密着しているの、ギルの体が硬直したのがよくわかる。刺激が強すぎたようだ。

「シエリイ、それぐらいにしてくれないと。ギルさんが使えいものにならなくなるんでべりっと、ジャックさんに引きはがされてしまった。しゅしゅーん。」

「ジャック、すまねえ」

体勢を立て直したギルが、ジャックさんにお礼を言う。

むー、ギル迷惑だったのかなあ。むくれていると、ぼんぼんと頭を撫でられた。立ち上がったギルが、私の頭を撫でてくれたのだ。

「お前は、少しは加減を考えてくれ」
「うん」

私は、素直に頷いておく。そんな私に、ギルは苦笑を浮かべていた。……守る気がないの、バレバレですかね。

「それで、ジャック。交代には、まだ早いんじゃないか？」

ギルは話題を変えた。交代って、見張りのことだよな。

「あ、はい。早めに起こしたのは、何か気配がしたので」

「気配？」

ジャックさんの言葉に、ギルは眉をひそめた。

気配。気配か。私は、ピンと気を張る。人間の姿をしていても、私は竜だ。気配探索はたんざくお手のものなのだよ。

「シエリイ、何か感じるか？」

ギルに尋ねられ、頷いた。気配探索に引つかかるものが、確かにある。

「居るよ。獣けものじゃ、ない」

「そうか」

それだけ呟くと、ギルは剣に手を伸ばす。ジャックさんも、ナイフを数本用意する。

私はさらに集中した。気配の正体は。場所は。殺気はあるのか。それらすべてを、探る。

「ギル、ギル」

「何だ、シエリイ」

「気配、初めて、感じるもの、だよ」

私は顔をしかめて、そう言った。

「初めて感じる気配、ですか……」

「あまり、良い感じ、しない。近くへ行くのは、ダメ。こっちにも、来ない」

「深追いは、しない方が良いか？」

ギルの問いかけに頷く。この気配、は……良くないものだ。でも、こちらに近づいて来るものではない。

「なら、今は動かない方がいいな」

「そうですね……、シエリイの勘を信じましょう」

「ふたりとも、ありがとう！」

信じてもらったのが嬉しくて、私は笑顔になった。

「さあ、方針が決まったんで、ふたりとも寝てください。ギルさんは、交代の時間になったら起こしますね」

「おう。後は任せた、ジャック」

ジャックさんに声をかけると、ギルはさっさとマントにくるまってしまった。

「シエリイ、今度はひとりで寝ろよ」

私に釘を差すのを忘れないギル。ぐすん。しょんぼりしながら、私は自分の寝床に戻るのだった。

「ジャックさん、お休み、なさい」

「はい、シエリイゆつくり休んでくださいねー」

ジャックさんはひらひらと手を振ると、ポケットからナイフを取り出して磨き始めた。

……ギルの体温を感じられないなんて、寂しいなあ。

翌朝。鼻孔をくすぐる良い匂いで、目が覚めた。

焚き火では、ジャックさんとギルが朝ご飯の用意をしていた。スープを作っているみたいだ。良い匂いが、ここまで漂ってくる。ぐうっとお腹が鳴る。ギルに聞かれなくて、良かった。

「シエリイ、起きたか」

「朝食、できてますよー」

ふたりに言われて、私は体を起こした。

「顔、直ぐ、洗う！」

川の近くで野宿したから、あつという間に川に着く。

さらさらと流れる川の水を、勢い良く顔にぶつけた。冷たい水の感触に、目が覚めてくる。

顔を洗った私は、川の水を鏡にして、持参した櫛で丁寧に髪をとかす。ギルの前に、寝癖のある頭で出るわけにはいかない。いや、まあ、私の髪の毛ってサラサラなんだけどね。寝癖、ついてな

いや。

「……よしー」

戦闘態勢はバツチリ。今日こそ、ギルに私の魅力を伝えるのだ！ 櫛を仕舞うと、私は走り出した。焚き火が目に入る。

「シエリイ、すつきりしたか」

「うん！」

ためらいなく、ギルのそばに座る。すると、微笑んだギルに頭を撫でてもらった。やったね！ 子童時代みたいな過剰なスキンシップはなくなっちゃったけど、こういうささやかな触れ合いも良いもんだなあ。

和んでいる私たちの横で、鍋をかき回しているジャックさんがため息をついていた。

朝食が、終わりました。

今、私は川で鍋と器を洗っている。

しかし、なかなか上手に洗えないなあ……

人間の姿をとれるようになってから、まだ日が浅い。その為、色々と要領が掴めないのだ。おかしいな、前世の私は人間だったのだから、手慣れていても良いはずなのに。何でだ。

思えば食事だって、そうだった。初めての食事のとき、スプーンが上手く握れなかったのだ。それで四苦八苦した苦い思い出がある。——あれか。日本人はお箸だから、上手くいかなかったのか。

うーむ、わからない。ただ単に、子竜時代の感覚が抜けてないだけかもしれないけど。子竜時代は、野生そのものだったからなあ。

考え込みつつ、器を洗う。そう。考えなくてはいけないことは、他にもいっぱいある。

そのひとつ、遮竜殿のことを私は思い出す。青いのや赤いの、黄色や黄緑。白いのに黒いの。一緒に育てられていた子竜たちは皆、元気にしてるだろうか。私が連れ去られてから、そんなに時間は経っていないのに。皆のことが、何だかとても懐かしく思える。

遮竜殿のことを思い出すと、必ず浮かぶ面影があった。

「ファナ、さん……」

ファナさんは、どうしているだろう。その疑問は幾度となく、私のなかで繰り返されてきた。お母さん代わりだったファナさん。私を裏切り、そして泣いていたファナさん。

今、私たちが目指している街、グラヴァイルに着いたら、遮竜殿に連絡が行くはずだ。そしたら、ファナさんとも再会するかもしれない。そのことが、怖い。私はファナさんを許せるのか、それとも……。私はふるふると頭を振った。

「今は、答え、出ない」

なら、考えたって無駄だ。だったら、今できることをやるのだ！

「よし！ 早く、洗おう！」

気を取り直し、私はジャブジャブと洗いのものを再開するのだった。

朝食の片づけも終わり、私たちは旅支度をしていた。

「マント、羽織ってー、鞆かけてー」

「シエリイは楽しそうですねー」

鼻歌を歌いながら準備していると、焚き火の始末を終えたジャックさんに言われた。

ギルは剣の手入れ中だ。その剣は、ガッドウさんからもらった大事な剣。

私は、ジャックさんに笑いかける。

「楽しい、ですよー！ だって、初めての、旅だもん」

森に羽ばたく鳥や、時折姿を見せる小動物たち。自然の木になる木の実の美味しさ。甘い実に、舌鼓を打つのは楽しい。まだ二日目だけど、私はすっかり旅のとりこだった。知識として知っているだけなのと体感するのは、大違いだ。

「それじゃあ、出発するか」

「そうですね」

焚き火の後の灰を、ジャックさんは足でならした。よし、グラヴァイルへの旅二日目、出発だ！

旅は徒歩なので、ゆっくりと景色を堪能できるところが良い。今、私たちが歩いているところは、右は首が痛くなるほど見上げなくちゃならないくらい高い崖で、左は森だ。そんな景色しかないのだとしても、それでも私は楽しんでるから、良いのだ！

お昼時になり、休憩を兼ねて昼食をとることになった。狩りに行くのはギルだ。

「ギル、ギル」

「ん、どうした。シェリイ」

「私も、連れて行って」

ふたりきりになるチャンスは逃しません！ けど、ギルは首を横に振った。な、何で!?

本当にびつくりだ。だって、ギルが私のお願いを無下に断ることなんて、今までなかったから。

なんだかんだと、受け入れてくれたのに。

「あんな。シェリイは竜としての気配を、まだ完全には消せてないだろ？」

「うっ、うん……」

ショックを受ける私に、ギルが説明をした。

私は自覚がないけど、人間の姿をしているけど、竜の気配が漏れているらしい。それは、ギルとあやふやな契約をしてしまったせいで、人間の姿でありながら竜でもあるという、不思議な現象を引き起こしているからだそうだ。

そういえば、私が近づくと鳥たちが一斉に羽ばたいて逃げちゃうんだよね。漏れている竜の気配のせいで、恐れられているのかも。

そのことに最初に気づいたのは、ギルだ。私が森に必要以上に近づくと、森のなかの獣がざわつくって。しゅしゅーん。

「酷かもしれねーが、シェリイが一緒だと獣が逃げてしまつて狩りにならないんだ」

「うん……」

ギルに諭され、私は俯いた。私、ギルの邪魔になっちゃうのかな。ギルの役に立てないのかな。……あ、なんか落ち込んできた。

そんな私に気がついたのか、ギルがぼんぼんと私の頭を撫でた。慰めるように。顔を上げると、優しい表情で私を見ているギルと目があつた。

「美味い肉取ってきてやるから、そんなに落ち込むな。それじゃあシェリイ、行ってくる」

「うん……」

「ジャック、後は任せたからな」

「はい、大丈夫ですよー」

それだけ言うと、ギルは森のなかに消えて行つた。ううう。

「恋の、駆け引き。敗北……」

「まだ、シェリイには早いと思いますよー」

そんな会話をしつつ、私は鞆から、発火石を取り出してジャックさんに渡す。ジャックさんがいつの間にか拾ってきていたらしい木の枝の束を纏めていたからだ。これは火を起こす準備である。

「実際に火を起こすのは、もう少し先でもいいですかね」

「うん……」

ギルに置いていかれたショックから、立ち直れていない私はしょんぼりと返事する。人恋しさから、ジャックさんの隣に体育座りで座り込んだ。

「シェリイは、本当にギルさんのことが好きですよねー」

「うん、大好き！」

即答する私に、ジャックさんは苦笑を浮かべた。

「……じゃあ、そんなシエリイに、昔話をしましょうか」

「昔話……」

「ええ、昔話です」

「昔話って、おとぎ話？」

カサトア王国に伝わる古い伝承たぐいの類しやうりやうてんなら、遮竜殿たかくさんでたくさん読んだ。全部、絵本だったけど。だ
けど私の言葉に、ジャックさんは首を横に振る。

「おとぎ話じゃなく、昔話です」

「どう、違うの？」

私はこてんと、首を傾げた。

「今から話すのは、僕とギルさんの昔話です」

「ギルの！」

昔のギル！ 気になるー！ 私は体育座りを解いて、ジャックさんに詰め寄った。

「教えて、ください！」

「あははー、一応、僕の昔話でもあるんですけどねー」

「ジャックさんの、昔も、気になるのー！」

ふたりの昔って、どんなだったんだろ。想像つかないなあ。ふたりの昔話とやらに私は興味きょうみ

津々しんだ。

「ジャックさん、聞きたい、ですー！」

私の期待に満ちた目に、ジャックさんは苦笑を浮かべた。

「……アナタには、知っていて欲しいですからね」

と、呟くジャックさん。私に知っていて欲しい？ どういうことだろう。ジャックさんは、姿勢を少しだけ崩した。

「今から、七年前の話になります」

そうして語り出したジャックさんからは、いつもの飄々ひょうひょうとした雰囲気は消えていた。

「……僕とギルさんは、学校の同級生だったんです」

「学校！」

ギルとジャックさん、学校行ってたんだ！

意外だ。傭兵をやつてるふたりしか知らないから、なおさらそう思う。

でも、学生なふたりかあ。せ、制服とか着てたりしたのかな！ 見てみたかったかもー！

私のはしゃぐ様子に、ジャックさんの表情が苦笑から笑顔に変わる。前髪が長くて目が隠れているから、ジャックさんの口元しか見えないけど、気配で何となく違いがわかるんだ、私。

「シエリイは、本当に良い子ですよねー」

「えへへ」

誉められちゃった！

「だから、ギルさんはシェリイを大事にしているんですよ」

「私、大事に、されてる！」

うん、わかっているよ！ 大事にされてる自覚あるもの。ギル、優しいもん。えへへー。

「良かったですね、シェリイ」

「うん！」

私は満面の笑みで頷いた。て、違った。

「それより、昔話して、ください！」

「ああ、そうでしたねー」

ジャックさんは、焚き火用の枝を束からひとつ抜きとった。そして、ガリガリと地面に何かを書いている。

「……カサトア、王立、竜騎士養成、学園？」

カサトア王立竜騎士養成学園と、そこには書かれていた。私が読み上げると、ジャックさんは口元に笑みを浮かべた。

「よく読めました」

「これぐらい、簡単！」

私は胸を張った。

それにしても、竜騎士養成学園か。確か、遮竜殿しやうりゆうでんにいたときに私も参加した選定の儀で、候補に選ばれた子たちも養成学園から来たって言ってたはず。あのとき来てた子たちと同じ学校だったり

するのかな。

「この学校は、竜騎士候補を養成する為に創られた学校なんです」

「ほー」

どうやら同じ学校のような。

「学園は、僕みたいな平民に対しても門戸を開いているんですよ。それで、僕も入学できたわけ」

ジャックさんは、選定の儀で赤いのがパートナーに選んだナツクんと同じだったんだ。私が参加した唯一の選定の儀のとき、候補として来ていたのは五人。そのうちナツクくんだけが平民だった。ていうか、平民っていう言葉、なんか嫌だなあ。そういえば、学園には貴族も居るんだよね。

いやーな感じの子とか、多そう。実際、選定の儀のときに来た貴族の子たち、青いのがパートナーに選んだジョルジュくん以外嫌な子だったもんね。

「貴族も、居た？」

私の問いに、ジャックさんは口元の笑みを消して頷いた。

「……居ましたよ、大勢」

ジャックさん、貴族に対してあまり良い思いがないようだ。まあ、私もないけど！

「まあ、学園そのものが貴族ご用達といった感じでしたからね。平民にも平等に学問に触れる機会を、と謳うたっている割に、差別的な貴族の子どもは多かったですよ」

「ジャックさん、嫌な思い、した？」

私はジャックさんが心配になって、聞いた。ジャックさんは、当時を思い出すように空を見上げた。

「そうですねえ。全部がそうだったわけではないですが。平民を見下す奴らは居ましたから。少数派な平民は色々絡まれることもありましたね」

「嫌な、人たち！」

貴族だからって、平民だからって、区別するのは嫌な感じだ。同じ人間なのにさ。人間に比べれば、竜は単純だ。力の差とかはあるけど、身分なんか無い。皆、平等。仲間だ。こうして竜になつてみたからわかるけど、人間って不便だなあ。

「そうですね。十歳で入学して十五歳で卒業するのですが、学園内は親の躰しっけが実によくわかる世界でしたねー」

子どもは、親を映す鏡のようなものだ。子が子なら、親も親だということか。ますますもって嫌な感じ！

「まあ、当時の学園には、鬱屈うつくつした思いを抱え込んでいる人たちがたくさん居ましたからね」

「どういう、こと？」

意味がわからず尋ねる私に、ジャックさんは答えてくれた。竜騎士養成学園と言いながらも、常に騎竜になり得る竜が居るわけではないのだと。

そもそも、竜の産卵期はまばらで、一定じゃない。私みたいに同じ時期に七匹も生まれることもあれば、一匹しか生まれなかったときもある。そして、竜の産卵期は間が空くのだ。毎年生まれる

のではなく、五年や十年と空く。

確か私たちは、前の子竜とは八年間あんだが空いていたはず。そのさらに前も、五年、そして六年と、間隔がある。うん、ちよつと子竜の居ない期間が長いよね。

子竜の居ない期間の養成学園の生徒は、当然竜騎士にはなれない。ただ学園に通い、卒業するのみだという。

ジャックさんの世代は、ちよつと子竜の居ない時期だった。つまり、彼らは竜騎士にはなれない。それでも竜騎士養成学園に通うのは、伝統ある学校を卒業したという箔はばをつける為だ。

竜騎士になれなかった竜騎士養成学園の卒業生は、国の治安維持を主目的とする『王の盾騎士団』に入団する率が高いらしい。『王の盾騎士団』は国内でかなり人気がある。つまり、就職に有利なのだ。

だから、貴族の家の子は、こぞって学園に入りたがる。家を継つがない子は、将来的には騎士団に入るのがほとんどだからだ。

一方で、ジャックさんのような平民の子は、平民でも学問に触れられるとあって入学するそうだ。入学できれば、無償で勉強できるから。ジャックさんは、勉強目当てだったのだという。

「いやあ、農家の末っ子だったから継げる畑もなかったんで。学問を身につけて、どっかの商会に入るうと思つてたんですよ」

「農家の、子!？」

「そこ驚くところですかー？」

「だって、ナイフが、わーって、できるから！」
てっきり曲芸師かなんかのお家かと。

「ああ。ナイフは傭兵団に入ってから仕込まれたんですよ。三年前ですかねー」
「ほー」

三年でここまでとは。ジャックさん、器用だなあ。

「話、戻しますよ」

「あ、はい」

今から、七年前に学園に入ったジャックさん。ん、つまりジャックさんは今、十七歳ってこと？
同級生のギルも、十七歳？ え、十代だとは知ってたけど、ギル意外と若い！ 十七歳であの色気は反則ですよ！ あ、いや、暴走しちゃった。反省、反省。

まあ、今から七年前にジャックさんとギルは、入学したのです。当時、十歳！ ぴちぴち！ 入学したばかりのころのふたり、可愛かったんだろうなあ。見たかった！

「入学して直ぐに学園の差別社会に気づいた僕は、ひっそりと過ごしていました」
ジャックさん、大変だったんだな。

ひっそり、こっそりと過ごしていたジャックさんだけど、子竜の居ない時期に入学してしまった貴族たちは、ジャックさんを見逃しはしなかった。

いくら箔をつける為に入学したといっても、彼らにも竜騎士への憧れがある。だが、その夢は入学して直ぐに破れてしまった。いや、今は居なくとも、選定の儀に参加できる十五歳までに子竜が

生まれる確率もあるにはあった。

だけど子竜が生まれてすぐの年に入学してしまった彼らに、その可能性は低い。そんな些細な確率に懸けられるほど、彼らはお気楽な性格をしていなかった。竜騎士への夢破れた彼らにとつて、平民出の学生は鬱憤を晴らす格好の的だったのだ。当然、ジャックさんも嫌がらせをされた。

ものを隠されたり、壊されたり、悪戯されたり。時には、校舎の隅に呼び出され、直接嫌みを言われることもあったらしい。……陰険な奴らめ！ そんなんだから、私たち子竜も選びたくないんだ！

私は、心根の真つ直ぐで優しい人を選ぶよ！ そう、ギルのような……あ！ ギルといえば、まだ話に出てこないけど、どうしたんだろう。そわそわする私に、ジャックさんは笑った。

「ギルさんのことが、気になりますか？」

「あつ、ごめん、なさい」

ジャックさんが嫌がらせされているくんだりで、ギルのことを気にしてしまうなんて。ダメだな、私！

「いいんですよ。シェリイが、ギルさんを大好きなのは知ってますから」

ジャックさん、優しいなあ。こんな私を許してくれるなんて。

「続きを、どうぞ」

「ああ、はー」

こほんと、ジャックさんは咳払いをした。

「嫌がらせは、続けました。でも、ほら僕こんなんで、あんまり気にしてなかったんですよー」
飄々と笑うジャックさん。確かに、ジャックさんは子どもの悪戯に動揺とかしなさそうだ。

「教科書とかなら、いつでも無料で配布してもらえましたし、壊された筆記具も同じです。そのところは、本当に平等でしたねー」

だから、全然問題はなかったと。ずい分と豪胆な子どもだったんだなあ。

だけど、貴族の子たちは違った。まったくこたえた様子のないジャックさんに、苛立ちを募らせていったという。

他の平民出の子どもたちも、ジャックさんの姿に勇気づけられていたから、余計に目障りだったのだろう。

とことん腐った性根をしている。

彼らはどうとう、ジャックさん自身に暴力を振るおうとしたらしい。誰にも見つからない、校舎の死角に呼び出して。

「あのときは、さすがに焦りましたねー。腹に拳のひとつでも入るのを覚悟しました」

「ど、どうなった、の？」

ゴクリと、私は喉を鳴らす。ジャックさん、大丈夫なのー！

「ギルさんが、助けてくれました」

ジャックさんは、あっさりと言いつつ放った。え、そこはもつと臨場感溢れる感じでお願ひします。というか、さらっとギルが出て来たただけ！

「いやあ、あのときのギルさん格好良かったですよー」

「ギル、どんな風に！」

「身構えてた僕の前に立って、止めるお前ら、って一喝したんです。迫力あったなあ」

「ギル、格好いいー！」

さすが、ギルである。あ、でも。

「貴族の子、反撃しなかった、の？」

そうなのだ。平民を見下している彼らが、ギルの登場だけで諦めるとは思えない。

何らかの攻撃は、してきたはずだ。

ジャックさんは、手をひらひらと振った。

「ああ、それは無理ですよ」

「なんで？」

「自分たちよりも、格上の家の子どもが相手ですからね」

「誰が？」

「ギルさんが。ギルさん、侯爵家の子なんです」

「え、え？」

ギルが、なんだって？ ジャックさんは、口元に人差し指を持っていく。

「僕がしゃべったというのは、秘密ですからね」

ちよつと待って、まだ混乱してる。

「ギルさん、貴族なんですよ」

と、ジャックさんが私にわかりやすく伝えてくれた。でもそれ、爆弾発言だよ。

え、ええええ!?

ジャックさんが言うには、入学当時からギルは目立っていたらしい。

「貴族つてのは、厄介な風習を持ってしまってるね。人間が体にもつ黒い色を、嫌がる傾向にあるんですよ。黒なんて、平民では珍しくないんですけど」

黒い色を体に纏まとっている人——髪や目の色が黒い、とか——のことを、黒色くろしきと言うらしい。

そして貴族のなかには、黒色は悪魔の使いだとかいう古いお話を未だに信じてる人たちが居るそう。

その話が信じられていた昔の時代に、貴族たちは黒色を徹底して排除してきたという。そのせいか、現在、貴族のなかで黒色は珍しくなったみたい。あ、排除といっても、殺されたりとかじゃなくて。幽閉されたり、一族から追放されて平民に下ったりするのだ。それでも、酷い話だけだね！貴族で黒色を排除した反動なのか、黒色が市井しせいに流れたからなのか、平民の間では黒髪黒目の子がたくさん生まれるようになって、いつの間にか古い言い伝えは消えてしまったとか。だから、一般的に黒髪黒目は受け入れられている。

しかも、言い伝えを信じてるのは貴族の間でも、子どもか一部の大人だけなのだそうです。……そのうち、貴族の間からも黒色への偏見がなくなるといいのに。

それはともかくとして。そういう背景があつて、黒髪黒目のギルは貴族社会では浮いた存在だっ

たようだ。ギルのバンダナつて、自分の黒髪を隠す為でもあつたのかな。あつ、でも学生のころのギルはバンダナしてなかったつて。校則違反だしね。

「同じ貴族の子どもからは、黒色を理由わけに避けられ、平民からは貴族だからと距離を置かれていましたね」

「ギル……」

入学当時のギルは、孤独だったのかな。貴族だということも驚いたけど、周りから孤立していたということが、私を驚かせていた。

私の知るギルは、ガッドウさん率いる傭兵団の皆に頼りにされていて、好かれている。ギャップがありすぎる。

「まあ、侯爵家の子を下位の家柄の子たちが避けるなんて、他にも何か理由があつたのかもしれないがね」

「ギルに、非はないのー!」

「あー、はいそうですね」

まったく、あんなにも優しいギルを避けるなんて、その貴族の子どもたちが悪いに決まってるよ!

「僕も最初のころ、ギルさんとは一定の距離を取ってましたねー」

「ジャックさん、まで!」

ギル、本当に孤独だったんだ。できることなら幼いギルのそばに、行ってあげたいよー!

むううと、眉を寄せる私に、ジャックさんは苦笑を浮かべた。

「最初のころって、言ったじゃないですかー」

「言ったけど……」

でも、ギルが孤独だったのは確かなのだ。私は、それがどうしても我慢がならない。すでに過ぎたことだというのに、その理不尽さが許せないのだ。

「シエリイは、本当にギルさんが好きですわねー」

「大好き、だよ！」

即答である。私は嘘のつけない、素直な子を目指すのだ。ギル、素直な子、好きかなあ。

「シエリイはそのまま居てくださいね」

「はい！」

私は元氣よく返事する。何だかごまかされた気がしなくもないが、良いのだ！

「まあ、とにかく。最初こそ距離を置いていた僕ですが、ギルさんに助けてもらってからは、違いました」

「おおー！」

ギルの孤独に光が差したか！

「ギルさんって、一見怖そうじゃないですか」

「うん」

それは、否定できない。本当は凄く優しいんだけどね。

「それは子どもころから変わらなかつたんですけど、庇かばつてもらってからはギルさんを見る目が変わりましたわねー」

「ほほー」

ジャックさんは、ギルをよく観察するようになったんだった。ギルのことを、もっと知りたいって思ったんだよね。ギルを観察して、ジャックさんはギルが凄くお人好しなんだと思ったそうだ。

まず、先生から何か頼まれたら絶対に断らない。何でも引き受けてしまう。それは、生徒である子たちに対しても同じで。掃除をサボる子が居たら、代わりに掃除してしまう。放っておけばいいのにと、ジャックさんは思ったらしい。怒られるのはサボった子たちなんだから、と。でも、ギルはやってしまうのだ。

そして、極めつけはよく動物を拾ってきてしまうところだった。捨て猫など、絶対に見捨てられない。

雨のなか、子猫を制服の併あせ目に入れて所在なさに雨宿りするギルの姿を見て、とうとうジャックさんは声をかけたいらしい。もう見てられないっ、と思ったそうだ。

「本当に、あの人はお人好しなんですよ。それを利用してしようとする奴らも居たりして、僕はそれが許せなかつたんです」

「うんうん！」

そうだよな！ ギルの優しさにつけ込もうなんて奴ら、許しちゃいけないよ！

「だから、僕がそばに居ないと！ と、使命感に溢れてましたわねー、当時」

拾った子猫のもらい先を一緒に探しているうちに、連帯感を覚えていったふたりは、それ以来行動をとるようになった。友達として。

「ギルさんはお人好しですが、成績は必ず抜けて優秀だったんですよー」

「何ですとー！」

少年なギルだけでも美味^{おい}しいのに、さらに成績も良いなんて。ギル、凄^{まじ}いねー。

本当にどんな美少年だったんだろう。あー、当時を知るジャックさんが心底羨^{うらや}ましい！

「意外かもしれないませんが、昔のギルさんは本当に貴族の子どもっていう見た目だったんですよー。制服もきつちりと着こなしてましたしー」

「ふおー、素敵ー！」

制服姿って、凶器だと思うの。美少年で制服きつちりなギルかあ。美味しい、美味しいよ！

私のテンションは、上がりっぱなしだ。想像のなかのギル、輝いているよ。

「ギルさんにはよく勉強を見てもらったり、剣技などの実技の特訓にもつき合ってもらいました」勉強もできて、実技も完璧なギルに、ジャックさんはたくさん助けてもらったらしい。

何も返せないと恐縮するジャックさんに、ギルはならば市井^{しじ}のことが知りたいと言ったという。

自分は、狭苦しい貴族社会しか知らないから、と。

ギルに請^こわれて、ジャックさんは何てことない日常を話した。兄弟の多いジャックさんは、ある意味戦いのなかを生きていたそう。食事はおかずの取り合いだし、新しい服も誰が着るのかで喧嘩^{けんか}だ。

末っ子として生まれたジャックさんは、兄弟たちに揉まれに揉まれた。それは、兄弟たちなりの可愛がり方だったのかもしれないが、ジャックさんにしてみればたまったものではない。ジャックさんは強くならなければならなかった。生き抜く為^{ため}に。

そうやって成長していくうちに、のらりくらりとかわす術^{わざ}を身につけ、力も強くなっていった。

今のジャックさんは、兄弟たちとの戦いで生まれたんだね！

兄弟間のやり取りの話をしたとき、ギルは目を丸くしていたという。だが、驚く反面、羨^{うらや}ましそうにしていたらしい。

「ギルさんには、弟さんが居るらしいんですけど、あまり交流はなかったそうぞうで」

それから、ジャックさんとギルはたくさん話をした。子どもころの遊びとか、肝^{きも}つ玉母さんの怖^{おそ}さとか。子どもたちだけでの森への探検や、それがバレたときのお母さんの怖^{おそ}さとかとか。

それら全部が、ギルにしたら驚きだった。ほどなくしてギルは、ジャックさんの生活に憧^{あこが}れを持つようになる。ジャックさんに頼み込んで、学校の休みの日に町に——しかも上品な貴族街ではなく、下町に行きたがるようになった。

最初は、庶民の世界を知らないギルを連れて行くのを渋^{しぶ}っていたジャックさんだけど、その熱意に押され連れ出すことにしたそうぞうだ。

初めて自分の足で訪れた商店街を、ギルは目を白黒させながらも、興奮した様子で歩き回ったそうぞうだ。

商店街で売っている食べ物を買って、ジャックさんから食べ方を教わったギル。恐^{こわ}々食^くべ、また

目を輝かせる。そんなギルの頭を、露天のおじさんがくしゃくしゃに撫でたそうさ。それにびつくりしたギルだったけど、豪快なおじさんからの扱いに不快感を見せることはなかった。

町では、子どもたちが走り回り、小さな子どもを地域で育てていた。その様子を、ギルはまた羨ましそうに見ていたという。ギルは、下町の温かさに夢中になっているようにジャックさんには見えなかった。

もちろん下町だ。危険な裏通りだつてある。そういう危険から、ジャックさんはギルを慎重に遠ざけたという。だけど、危険はあるのだとギルに警告することも忘れなかった。

実際、人混みのなかでスリに遭いかけたこともあった。ジャックさんが直ぐに気づいたので、大事には至らなかつたが。そういう出来事があつても、ギルは下町に行くことを止めなかつた。下町に行く為に、目立たないような平民の服を用意するほどだった。

「のめり込んでいくギルさんは、自分に足りないものを満たす為にそうしているように見えませんでした」

貴族が使わないような、粗野な言葉を覚え始めたギル。学校では隠していたけど、ジャックさんの前ではずい分と砕けた話し方になっていったそうさ。ギルにとって、下町は自身を変えてしまいうぐらい、刺激のある場所だった。

『ありがたい、俺は今満たされている』。ギルさんは、僕にそう言いました」

ジャックさんはその言葉で、侯爵家でのギルの扱いを察したのだという。ギルは、侯爵家でも孤独だったのではないかと。学園でともに過ごしていくうちに、ジャックさんはギルのなかにある

深い孤独に気づくようになった。

だから、ずっと一緒に居た。学年が変わっても、クラスが違つても。極力一緒に居るようにした。学年が上がるごとに、貴族の子どもたちは社会を知るようになり、今更ながら侯爵家の子どもであるギルにすり寄るようになってきたという。本当に、今更だよ！ 散々、ギルを無視しておいてさ！

ギルももちろんそう思ったのか、すり寄る輩を相手にはしなかつた。味方は、ジャックさんだけ——そう思っている節が、ギルにはあつたそうさ。

「自惚れでもなく、僕だけがギルさんの友達だつたんですよ」

「ギルと、ジャックさん、今も、仲良いもん」

「ええ、そうですねー」

私の言葉に、ジャックさんは微笑んだ。

「皆が皆、シェリイみたいに素直なら良かったんですよね」

「え？」

私の頭を、ジャックさんは撫でる。優しく。

「私利私欲で動く奴らは厄介ですよ。そして、権力を手に入れようと躍起になる奴らは特に」

ジャックさん曰く、ギルにけんもほろろに遠ざけられた子たちは、憎しみの念を深くしていったらしい。

そして、その心はギルではなく、その隣に居た——ジャックさんに向けられたのだ。

「……そうして、事件は起きた」

ジャックさんは、つらそうな口調で、告げたのだった。

事件——。沈痛なジャックさんの雰囲気、胸騒ぎがする。

ジャックさんやギルの身に、何が……

ジャックさんは持ったままの杖で、また地面に文字を描いていく。そこには、『在学三年目』とあつた。在学三年目……十二歳のジャックさんとギルか。

「……僕たちが、三年生に上がった時期でしたかね」

ポツリポツリ、ジャックさんは話す。今までとは違い、口調が重い。

「ジャックさん、つらいなら……」

無理に話さなくても良いんだよ、と言おうとしたけど。ジャックさんは首を横に振って、制した。

「ここまで、話したんですから」

「でも……」

ジャックさん、つらそうだ。それに本当に、良いのだろうか。私が全部聞いても。

ギルとは確かに、唯一無二のパートナーだけど。でも、ジャックさんみたいに、長いつき合いではない。本当に、良いのかな……。躊躇ためらっている、くしゃりと頭を撫でられた。

「聞いて欲しいから、話してるんですよ。シェリイには、ギルさんのことを理解してもらいたいから」

そう言うと、私の頭から手を離れた。

「まあ、僕の我が儘まがごころみたいなもんですがね」

はは、と軽く笑うジャックさん。そこにはもう、さっきみたいなつらそうな様子はない。私、聞いてもいいんだ。そんな気がした。

「うん。聞く！」

「ありがとうございます」

ジャックさんは、そう言うと続きを話し始めた。

「……僕とギルさんが、三年生になった年。僕らに、特進学級へ進学をしないかという話が出たんです」

「特進、学級」

聞き返した私に、ジャックさんは教えてくれた。特進学級は、四、五、六年生のなかの精鋭だけを集めたクラスなんだそうだ。その出身者の多くは王の盾騎士団に入り、そのなかでもエリートである、王を直接的に守る、近衛騎士になれるんだって。

そんなところを選ばれるなんて、ギルもジャックさんも、凄まじい！

「ジャックさん、嬉しかった？」

わくわくしながら、私は尋ねた。ジャックさんは頷いた。

「ええ、とても。僕みたいな平民にしたら破格の待遇ですから」

すべては、勉強や実技を見てくれたギルのおかげだとジャックさんは言った。ふたりが日々切磋せつさ琢磨たくまして、その努力が報われようとしていた。

しかし、そんなふたりに暗雲が立ち込めた。

「……僕らの成功を、素直に喜べない輩が居たんです」

「……すり寄って、きてた人たち？」

「ええ、そうです」

彼らは、自分たちを拒絶したギルを恨み、成功しようとしていたジャックさんを憎んだ。

そして、それが最悪の事態を引き起こしたのだ。

「奴らは、不満をあらさまに態度には出さなかった。年を取った分、賢くなったんでしようね」
特進学級への話が出てから一カ月。彼らは静かだった。不気味なまでに。だけど、特進学級の話に浮かれてしまっていたギルとジャックさんは、そのことに気がつかなかった。前しか見えていなかったのだ。

「特進学級への進学の準備で、僕らは離れていることが多くなったんです」

その隙を、彼らは見逃さなかった。

「僕がひとりになったとき、囲まれてしまいましたね」

もっと慎重になるべきだったと、ジャックさんは苦笑った。

ジャックさんを連れ出すことに成功した彼らの目は、危険な光を孕んでいたという。

「ああ、これは不味いと思いますね」

ひとりが、刃物を取り出したのだ。

「傷害事件なんか起こしたら、自分たちがどうなるかなんて頭にないようでした」

それとも、平民相手ならもみ消す気だったのかも。とことん性根が腐っている奴らだ！

「どう、なったの」

私は不安いっばいに聞いた。

「僕だって、特進学級に進学しようとしている身ですよ？ 当然、かわしましたとも」

「おおー！」

「……まあ、それがいけなかったんですがね」

軽くかわされて、相手の頭に血が上がった。見ていただけの子たちも、隠し持っていた刃物を向けてきたのだ。

「多勢に無勢。さすがに、僕もキツくなってきて……」

そう言うと、ジャックさんは長い前髪に手をかけた。そして、かき上げた。

「あ……っ」

思わず声が出る。ジャックさんのはしばみ色の澄んだ瞳が見え、そしてその上にある額には、大きな傷があった。

「ざっくりいきましたよ」

目を細め、ジャックさんは前髪を下ろした。傷はもう見えない。

どくんどくと、心臓がうるさい。それほど、酷い怪我だった。

「……嫌なもの、見せてしまいましたね」

「ううん、ううん！」

私は必死に首を横に振る。

酷い、酷い！ 頭のなかは、その言葉でいっぱいだった。痛かっただろう。怖かっただろう。当時のジャックさんの気持ちを考えて、胸が鋭く痛む。

「今はもう痛まないですよ。ただ、雨の日は疼きますが」

「ジャック、さん……」

平気そうに振る舞うジャックさんの姿が、苦しい。

あんな大きな傷をつけられて、平気なわけがないじゃないか。

そんな生易しい怪我じゃ、ない。

それでもジャックさんは、語るのを止めない。すべては、私に過去を教える為だ。聞かなきゃ。ちゃんと心に刻まないといけない。

「……視界が、真っ赤に染まりました。そして、地面に膝をついた僕が見たのは——」

両目を見開き、立ち尽くすギルの姿だった。そして……

「目に血が入り、視覚を奪われた僕の耳に、悲鳴が聞こえました」

誰かが逃げ惑う足音。助けて、許してと、叫ぶ声。ジャックさんの耳が拾った音は、まるで地獄のようだった。

「何とか血を拭い、片目だけでも見えたとき。あの場で立っていたのは、ギルさんだけでした」

他はうずくまって顔を覆っている子や、言葉にならない泣き声を上げている子。恐怖が場を支配していた。そして、圧倒的な存在感を放つ支配者はギルだった。

「しばらくして、騒ぎを聞きつけた先生たちがやってきて、僕は医務室に運ばれました」

額の傷の痛みで意識が朦朧としていたジャックさんが、一番の怪我人だった。

先生に抱え込まれたジャックさんが、意識を失う前に見たのは、今まで見たことない形相で拳を握り締めるギルの姿だった。

「……次に僕が目を覚ましたとき、ギルさんがそばに居ました」

静かな目をしたギルは、ベッドに横たわるジャックさんに向かって言ったそうだ。

「俺は、ここを辞める。全部、捨てていく。」と

「そんな……！」

確かに、ギルも暴力を振るったかもしれないけど！ でも、悪いのは憎しみの心で動いた彼らじゃないか！

「止める僕の言葉にも、ギルさんは意思を変えなかった。ギルさんは、絶望したんですよ、貴族や自身のしがらみに」

「しがらみ……」

ジャックさんは頷いた。

「事件は、なかったことにされたんです。……ギルさんのご実家が動いて」

それは、ギルの為というよりは、家の体裁の為だったそうだ。その証拠に、ギルの家族は誰もギルに会いに来なかったという。

「自身は裁かれず、僕の傷もなかったことにされて、ギルさんはすべてに絶望したんです」

ジャックさんの怪我が、自分が今まで相手にしてこなかった人間の仕業だったというのも、ギルの罪の意識を大きくしていた。

「自分には、夢を見る資格はない。そう言つて、ギルさんは僕の前から居なくなろうとしたんですけど」

「うん」

「僕も学園辞めて、ギルさんについて行くことにしちゃいました」

「ジャックさん！」

軽い調子で言っているけど、ジャックさんは重大な選択をしたのだ。安定した未来よりも、友達であるギルを――

「いやあ、自分でも驚くほど学園に未練なかつたですよー」

それよりも、ひとりで旅に出ようとしているギルが心配だつた。そのころのギルは、本当に世間知らずだつたから。ジャックさんは、ギルを追いかけて同じく旅に出ることにした。

最初のころ、ギルから「お前は学園に帰れ」と言われてたそうだけど、何を言つても意思を変えなかつたジャックさんに、いつしか文句も言わなくなつたらしい。ギルも、独りは寂しかったのかもしれない。まだ、十二歳だし。

「子どもだけの旅だつたんで、危険もそれなりにありましたよー」

野党に襲われたり、それを返り討ちにしたり。詐欺に遭い、無一文になったり。

だけど、その詐欺集団を懲らしめてくれたのが、ガッドウ傭兵団だつたのだ。

「村の男が同じく詐欺に遭つたみたいで、村から出張つてきてたんです」

「ほー！」

それから、子どもだけの旅は危険だからと、ガッドウさんに誘われて、深き森に根づく村にやつて来たのだそう。

ふたりを、村の皆は温かく迎えてくれたんだつて！ 良かった！ それで、しばらくの間は村で穏やかに過ごして、三年前に傭兵団に入団した、と。

「傭兵団での生活は、大変なことも多かつたですが、充実してました」

「うんうん」

ジャックさんやギルが、あそこで穏やかな暮らしをしていたのを、私は知っている。

村に馴染んだギルは、傭兵団の大人たちに剣を見てもらつてさらに強くなつていったらしい。

学園を出てからのギルは、暗い表情を浮かべていることが多かつたけど、村に来てからは下町で見せていたような笑顔を皆に向けていったんだつて。本当に良かった、とほつと息を吐いたとき、ジャックさんが私に言った。

「シエリイ。ギルさんの夢が、何か知りたいですか？」

「ん？」

ギルの夢？ そういえば、ジャックさんに、自分は夢を見る資格はないつて、言つてたんだよね？ 何だろう、気になる。前にガッドウさんが、ギルのことを夢破れたつて言つてたような気がするし。

「……知りたい、です！」

私は考えた末、そう口にした。ジャックさんが、口元に笑みを浮かべる。そして、くしゃりと私の頭を撫でた。

「竜騎士、ですよ」

その答えを聞いたときに、私のなかを駆け巡った感情を何と言えば良いのか。

——そう、誇らしさだ。私は、ギルの夢を叶えられたのだ。そして、ギルを選んで良かったという嬉しさと、ギルに出会えた、喜び。神様に、何もかもを感謝したい気持ちになった。

私は、ジャックさんを見た。

「あり、がとう！」

教えてくれたことへの、感謝を述べる。知ることができて良かった。ギルとジャックさんのつらい過去も、知って良かったと、思った。私は、ギルの支えになろう。そう思うことができたから。

「シエリイ。僕の方こそ、聞いてくれてありがとう、ですよ」

「うん！」

ジャックさんが教えてくれたことで、私のなかで何かが変化した。これが、きっと成長するってことなんだ。

ふと、草を踏む音がした。

「ギルさんが、帰ってきたんですね」

ジャックさんは、足元に書いた文章を足で消した。

「じゃあ、シエリイ。今の話を僕がしたっていうのは、ギルさんには内緒でお願いしますよ」

「はい！」

私たちは顔を見合わせて笑った。

「シエリイ！」

森から出てきたギルに、私は駆け寄る。

ギルは、うさぎを数羽、縄で吊っていた。ほほー、うさぎが今日の収穫ですか。日本のいただきますの理念に基づいて、美味しく、大切にいただきますよー！

「シエリイ、森のなかを歩いてたらこれを見つけたんだ。土産みやげな」

「お土産！」

ギルが、私に！ 嬉しい！ なんだろう？ 綺麗なお花？ それとも、綺麗な石とか？ わくわく。

「ほら」

ポトンと、大振りなものが私の両手に落とされた。

あの、ギル……。私は、しゅしゅーんとうなだれて両手の上にあるものを見た。いや、ギル……。これは、あの……。私の様子に、ギルは眉を下げた。

「なんだ、シエリイは嫌いだったのか？ ルシュカの実」

「そう、じゃない、けど……」

違う、違うんだよ、ギル。ルシユカの実は、嫌いじゃないよ。桃みたいで、甘いし。そうじゃなくて。この丸っこいピンクの果物を、私へのお土産にチョイスしたことがだね、問題なのだよ。

だって、これ……。私の返答に、ギルが笑みを浮かべた。

「お前がチビだったところに、そっくりだろ？」

「ぬううう……っ」

やっぱりか！ やっぱり、子竜時代の私を連想してこれを選んだのか！ この丸いフォルムに、ピンクの色で！

「ギル、デリカシーって言葉、知ってる？」

「でり……？ 何だって？」

「何でも、ない！」

「シエリイ、なに怒ってるんだ？」

ぷりぷりしながら、私はルシユカの実にかじりついた。ふんだ！

「おい、ジャック。なんでだ？」

怒れる私に困惑したギルが、ジャックさんに助けを求め。ジャックさんは、苦笑いだ。

「ギルさん、配慮が足りなかったんじゃないですかー」

「何だよ、それ」

ギル、ジャックさんの言う通りだよ。むしゃむしゃ。

「……シエリイ、頑張ってくださいね」

「……わかって、るの」

ギルが鈍いことなんて、今更だもんね。頑張れ、私！

私は遠い目をして、ルシユカの実を食べ続けたのだった。

ジャックさんが手早く支度して、昼食が始まった。火にあぶられたうさぎ肉の匂いが、鼻孔をくすぐる。

ぐうつと、お腹が鳴る。うー、ご飯ー。

「シエリイ、そんな物欲しそうな顔をしなくても、ちゃんとありますよー」

「わかって、るのー！」

でも、だね。良い匂いがするんだよー。我慢できないー。

ジャックさんが荷物のなかから特製のタレが入った小さな壺を出し、肉に垂らす。うー、もうたまらないー！

「はい、シエリイ」

ジャックさんに、串に刺した焼けた肉を差し出された。

「わーい！」

お肉にかじりつく。

「熱い！ 美味しい！」

熱くて舌を火傷したけど、特製のタレが染みたお肉は美味しかった。うー、お腹が満たされていくよー。

「ジャックさん、美味しい、のー！」

「それは良かったですねー」

ギルも、お肉に舌鼓を打っている。タレがお肉の臭みを消してくれているんだよね。うまうま、なのー！

「――獣、ですか」

「ああ。さつき狩りに行った先で見かけたんだ」

私が夢中でもぐもぐしている間に、ジャックさんとギルが何だか深刻そうに話している。

「……普通の獣と違う。狼に似ていて、とにかく黒い」

「黒い獣、ですか」

ジャックさんが考え込んでいる。

黒い獣？ 私の知識が反応する。これは、竜の方の知識だ。私のなかに深く沈んでいたものが、浮上してくる。日本の知識は大量に、しかも浅い場所にあっても引き出せるけど、竜の知識は違う。私が親竜から引き継いだ、この世界についての知識は少なく、なおかつ深い場所にある。この違いが何なのかは、私にはわからない。

けれど今、その少ない竜の知識が引き出せるのだ。ゆっくりと、私の深いところにあるその知識を引き上げていく。黒い、獣。それは……

「魔物……」

「シエリイ？」

聞き返したギルの袖を掴んだ。

「ギル。黒い獣は、魔物、だよ！」

「魔物って、千年前に現れたっていう、あの魔物ですか？」

ジャックさんが驚きも露わに言う。

ジャックさんの言う通り、魔物は千年前に現れたとされている。千年前に、金色の魔物が突如出現した。その魔物は、他に黒い獣を引き連れていたという。ギルが見たのは、その黒い獣かもしれない。

「千年前って、そんなの大昔のおとき話じゃないですか」

「……俺たちも、昔習う機会があったから知ってるだけだしな」

「ん、と。魔物、はこんな感じ、だよ」

私は脳裏に浮かぶ魔物の姿を、木の棒で地面に描いていく。簡単なデフォルメされたイラストだけど、特徴は捉えていると思う。狼より大型で、頭の左右には細く長い角が生えている。尻尾はふたつにわかれている、目は赤い。

「これは……」

でき上がった魔物の絵を見て、ギルがゴクリと喉を鳴らす。

「何と言いますか……」

ジャックさんが額から汗を流した。

「かなり独創的ですね」

「そう、だな……」

ふたりとも酷い！ 私は地面に両手をつき、うなだれた。

「だが、特徴は捉えているんだよ……。俺が見たのも角があったし、尻尾もふたつだった——気がする」

ギル！ 私のイラストでも、認めてくれるんだね！

「変わった絵だが、特徴は合ってる」

ギル、上げて落とすとは！ うわーん！

「……あれが魔物だとすると、警戒が必要だな」

「グラヴァイルの騎士団にも報告しないといけないですね」

ギルとジャックさんが真剣に話し合っている。

「魔物の強さがわからない以上、刺激したくはない。シェリイ」

「はい……」

私はしょんぼりと、返事をする。

「お前は、絶対森に入るなよ」

「……うん」

私、何かもう、色々ダメだなあ。落ち込みながら、私はイラストを消すのだった。

昼食を終えた私たちは、また旅に出る準備をしているのだが——静かだ。静か過ぎる。

「……」

無言のまま、ギルとジャックさんが目配せし合った。ふたりとも、険しい顔をしている。

「ジャック」

「はい、ギルさん」

心得たとばかりに、ジャックさんが頷く。長い月日をともしたからこそ、以心伝心なのだろう。ギルとジャックさんが、立ち上がる。

「シェリイ、やっぱ気になるから見てくるわ」

「何を？」

「黒い獣だよ。シェリイの言う魔物なのか、もう一度確認してこようと思う」

「ええ。この先の旅路の安全も確保したいですし……」

ギルに続き、ジャックさんも真剣に言う。それだけ、今の状況が危険だということなのだろう。

「私も……」

「いや、お前の気配は獣を刺激する。今回は、留守番してくれないか？」

「でも……」

「シェリイ、僕たちを信じてください」

ギルだけでなく、ジャックさんにまで言われてしまえば、私に拒否権はない。